

千歳ラグビー創立当時の思い出

中山靖由 第5期

かつて「人生わずか50年」という言葉があった。日本人の平均寿命が女性82才、男性78才を超えた今、50才はまだ中年に数えられるこの頃だが、かつては人間の一生は50年が区切りとされていたのである。千歳のラグビーが誕生して50年。かつての全人生に匹敵する歳月が流れた事である。

昭和20年8月、戦争は終わった。祖国日本の為に特攻隊員となるべく予科練に身を提した4期、5期の何人かが復員して千歳の学校に帰って来た。かつて海軍で訓練と体力増強に使われたラグビー（かつては闘球と呼ばれた）を経験した4期の方々を中心に4期生相馬、五島（晋）、五島（己）、佐藤、野谷の先輩そして5期生の吉田、角田、石田、岡、花形、岡山、中山等が主なメンバーとして200日余りの産みの苦しみの後に呱呱の声をあげた。食糧、衣服、住宅も無い状況の戦後に我々はラグビー部を誕生させる為に戦った。部設立について大きな障害があったからである。その1つは戦争中日本海軍が精神面と肉体面で闘争心を奮い立たせる格闘技のラグビーを闘球と呼んで起用して居た事が理由でGHQの反対を心配して学校側が部設立を拒否した事。次に設立時の主要メンバーが復員軍人であった事。第3に当時は物凄い食糧難でとてもラグビーどころでは無いとの猛反対があった事である。戦後の放心状態の中で、4期の先輩達は「ラグビーをやろう」という目的を与えて呉れた。GHQの考え方を確かめ、いかにラグビーがスポーツ性として優れて居るかをスポーツ

権威者から証明して貰い、そして食糧を自給して、証拠を持って学校側に部設立を嘆願したのだった。東奔西走の証拠集めの結果は3つの反対を蹴散らしたのであった。

今迄の我慢の末に晴れてラグビー部として学校側に認められたラグビー部創設部員は堰を切った水のように練習に励んだ。最低10本のオープン練習（我々はドンドンと呼んだ）はグラウンドを共用する野球部に一寸どいて貰ったりして暗くなるまで走りまくった。それは半端では無い練習であった。コーチとしては当時の名スタンドオフ、早稲田の堀氏。そして明治の名フルバック、笠原氏及び明治の2軍に八幡山で胸を借りた。血の出る様な練習の結果昭和22年の全国大会で、準々決勝14-0、準決勝0-0での抽選勝ち。しかし成城学園に14-0と決勝戦では涙をのんだ。東京代表決勝で負けた口惜しさを晴らす為翌年には5期吉田キャプテンを中心としたチームの猛練習が始まった。

全国大会では東京制覇、関東大会では高崎を破り、花園では四條畷に9-0で惜敗した。創部当時の思い出としては沢山のエピソードがあるがそれらについては又の機会に皆さんに話し度いと思う。これらの輝かしい伝統を持つ千歳ラグビー部、そしてその現役を精神面・技術面・経済面でしっかりと包み励ます千歳ラグビーOBクラブがしっかりと根を張ってこれからの50年も大いに発展し千歳ラグビーの名を天下に広めて呉れる事を切に願う次第である。最後に千歳ラグビーの皆様の益々の御健勝をお祈りします。